

戦争の思い出

杉田 美枝（昭和 10 年生まれ）

満 3 才、父召集を機に渡満。吉林省公洲嶺木下町 1 丁目 11 番地。鉄道警備隊官舎生活、広い道路前に飛行場。毎日訓練、隣少年学校実演訓練、住宅前無線兵の実習兵隊と共の明け暮れ、私の就学前秋、父は鞍山市の満州神鋼株式会社へ転職。南五條町 33-1 番地、神鋼社宅生活。鞍山は鉄、石炭が採れ、工業地ゆえ大きな溶鉱炉が有り、敵の標的となる。

私が低学年の頃、上級生男子は銃の訓練、女子は竹槍、低学年はヒマワリ植えと防空演習。3 年夏頃から溶鉱炉上に煙幕を張る様になり、煙幕が見えるとサイレンが鳴る。敵機来襲、全員避難、私を頭に姉弟 5 人壕へ逃げる。父母は役員で出勤、子供だけの心細さ悲しさを知る。弟は体調不良、手術を要すが空襲が多く中断続き。行った時は遅く一命を落とす。

日増しに爆弾の降下数も増す。安全地帯へと避難者が多く、低空飛行の機銃掃射を受け、全滅の声を聞く。私の大宮国民学校を除いた他校は全滅と聞く。20 年 7 月末父に召集。人目避け行き先不明、姿消す（新京からソ連抑留）。

20 年終戦、無人学校へある日突然、日本兵が大勢集まる。東京方面の部隊、毎朝列を連ねて何処かへ行き、夕方帰ってくる。ある夜突然数人の兵隊が助けを求めてきました。脱走したのです。母は父の衣服を与え逃走させました。当家に 3 名居残り、仲間と連絡を取り合っていました。脱走兵が見つければ銃殺です。数日後居残り兵はソ連兵監視で姿を消し、入れ替わりソ連兵が来る。日本人からの物色品の中にお骨が白い布に包まれ沢山有りました。宝物と思ったようです。

ソ連兵が去り、中兵軍と八路軍の内戦です。どの軍が入っても大宮国民学校南門に本部、我が家から校内は丸見えです。何軍が天下でも変わりません。互いに捕虜を車で運んで来て、数人ずつ横一列に並ばせ、目隠しで前進させ銃で撃つを繰り返す。ソ連兵が行った時、日本兵だと思います。

社宅 3 棟を挟んで西側に満鉄寮、3~400 百メートル離れ東側に神鋼寮が有る。どちらの寮も本陣として社宅は窓を開け通路となり戦場、銃弾は頭上を飛び、畳に布団を被り伏す。また弾の中、五女出産にて助産婦を呼びに物陰に隠れながら「ピュン」という音を耳に聞きながら。

冬のある日、零下何十度の日、激戦で寮の一室へ数家族避難。火がなく布団の中で数日送った。食料無し、動くと体力消耗するので。

21 年 2 月 11 日寒い一日、父が銃を隠しているとの家宅捜索。私と妹が人質、皆の前でピストルに弾を詰め、2 人を外へ連れ出し、胸にピストルを当てられ色々問い質された。父は鞍山に来て武器の持参はなく、また公洲嶺でピストルは見馴れていたのか、2 人共泣きませんでした。開放され帰宅。大人達は生きて帰宅は不可と思っていた様でした。

以後あれほど続いた内戦も影を消し、引き上げの声を聞く。初夏に入り、鞍山一般最後の引き上げ仲間入り、母子供 5 人、無貨車急停止、金の要求を繰り返す。また長い道程を歯を食い縛り歩く。列を離れると置いて行かれる。脱落者は居ないかと中国人が目を光らせて待っている、夢

中で歩いた。

収容所は先発隊新京方面からコレラ発生にて引き揚げ中止で入居できず、野営テント生活。3日分の食料持参が1か月余り過ぎ、コップ1杯の水も買わねばならず、持参金は底を着く。

ある時、私と妹が買物へ。中国人がリンゴをくれるというので、妹が手を出すと引っ張られ、私は大声を出しながら必死に妹の手を引き返し、2人で泣きながら母の元へ帰った。当時中国人は女の子を大変欲しがっていました。雨の日に無貨車で錦州^{きんしゅう}へ向かう。頭から足先までぬれ、寒く誰も生きた顔色無し、ただふるえていた。

コロトウより上船ですが船までに赤土色の水を胸まで埋り歩かねばならず、母は背中に1人、手荷物と私、妹1人は渡れても他の2人は出来ず悩んだその時、国籍不明兵が両脇に2人を抱えて上船させてくれました。命の恩人です。やっと上船出来ました。博多^{はかた}港近くで沈没船を何隻も見ました。博多上陸、福岡駅で1人2個オニギリを頂きました。麦、米、うどんくずの様なのが混ざった物でしたがとてもおいしかったです。

本籍地^{ほんせき}へ帰る。残した家財は姿消し、父名義の家も自由にならず、母は義姉から苛められ、父抑留中、母1人で私達を守る。25年秋、父が体調崩し帰国。「うつ」、「ノイローゼ」、あわせて警察の監視に悩まされ身動きできぬ状態。人を見れば隠れ頭^{かぶり}に物を被る。特に人に怯えていました。

一部の人から「何で満州から来た。満州へ帰れ。お前等が来たから食べ物が少なくなったのだ。」と言われ、子供心にも傷ついた。方言語も分からず、生活様式も違い、また満州へ戻りたいと思った。

叔母と「流れる星は生きている」と云う映画を見た。引き揚げ上船場面が同じ。私は「あそこ、私も歩いた」といったら、叔母が「可愛そうだった」と泣いていた。

私は最近まで飛行機の爆音、時を告げるサイレンの音を聞くと不安になり、体がふるえた。時々耳にする「残留孤児」の記事を見聞きする度に「一步間違えば私たち姉妹も仲間入り、今頃テレビ新聞沙汰だよ」と時々当時を思い出し、残された方に同情いたしています。戦争は嫌だ。